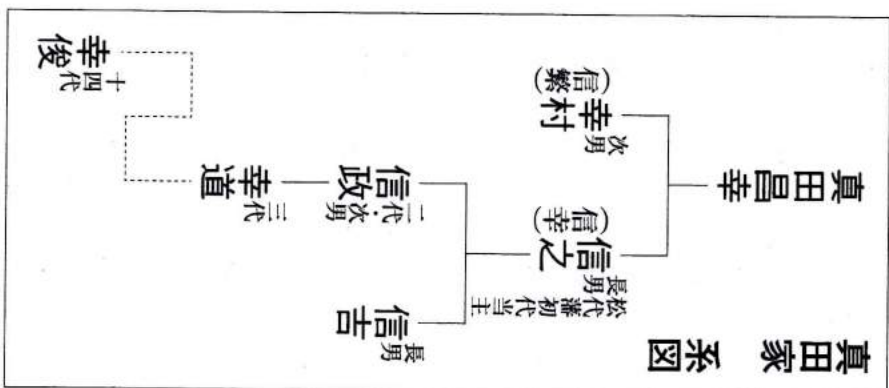


真田家系図



真田家が徳川に忠誠を誓いながら、石田三成からの書状を密かに保管し続けたのは、いつ何時、世の中が引っくり返るかわからないと考え、再び西側が勢力を持つことになら、この書状が役に立つかもしれない。東か西かの選択を迫られた時、どちらの側にも付けるようにと

真田家はもとど信州の豪族で、はじめは武田信玄に仕えました。武田家滅亡後、織田、豊臣と主君を變え、関ヶ原の戦いでは、皆きんご存知のとおり、当主である昌幸と次男の幸村(信繁)が西軍(石田勢)、長男の信之が東軍(徳川勢)につき、親兄弟が敵味方に分かれて戦いまし

「絶対に開けてはならぬ」と言い伝えられてきた黒い漆塗りの箱がありました。箱はさらに長持ちに入れられ、嚴重に保管されていた。一体、何が入っているのか、代々の当主にわからなかつたそうです。明治の世になって、「もうそろそろ、いいのではないか」という話になり、恐る恐る開けたところに入っていたのは、なんと関ヶ原の戦い

で西軍の大將だった石田三成から送られてきた書状でした。「当暮来春の間、関東御仕置のため差し遣はさるべく候」と、関ヶ原の戦いに向け、関東すなわち徳川方に対して軍を派遣し、西軍に味方するようにとという内容です。それにしても、なぜ、そんなものを後生大事に保管してきたのか。万が一、徳川家に知れたら、「不忠である」と咎められ、お家取り潰しに

ところが、この戦いぶりを見て、家康は逆に真田家に対する評価を高めた。敵対するのではなく手を結ぼうと考え和睦し、信之を与力大名として召抱えました。家康は身近に信之を召して、ますます人物を見込んで、自分の養女である小松姫(徳川家重臣・本多忠勝の娘)と結婚させます。

痛手は相当なものだっただろうです。城に籠った昌幸と信之は、領民をすべて城内に引き入れて戦うという奇抜な作戦で、徳川の大軍を撃退しました。この時、徳川側に与えた一度目は豊臣時代で、信州の統治をめぐって徳川家康と対立し、真田の本拠地である上田城で合戦になった。これら二度にわたり徳川軍と戦い、退けています。

上ない代物です。ですから他の大名家だと、こういった江戸時代に燃やしているそうです。歴史学者の先生にも、「どうして持っていたんですか。危ないじゃないですか」と言われたのですが、私に言われても……(笑)。真田家発祥の地である信州は、東と西の狭間で。しかも周りは強敵



石田三成書状
書光御願物置箱
吉点とも真田宝物館所蔵
状が入っていた

徳川時代になぜ家を守り抜けたのか

真田昌幸
真田幸俊
真田家十四代当主
関ヶ原・備前 石井妙子



真田家に伝わる石田三成の書状

ら戦国時代を生き抜き、家を残していく苦勞は、並大抵のことではなかつたと思うのです。

信之自身は健康に厚く信頼されましたが、徳川家を苦しめた真田家に對する遺恨は徳川家周辺にずっとあつて、江戸時代を通じて真田家は警戒され、厳しく監視されました。そのような環境では、些細な粗相も許されません。信之は細心の注意を払っています。自分の名前を「信幸」から「信之」に変えたのも、そのためです。昌幸と同じ「幸」の字を使わない、自分は徳川に忠誠を尽くすという意思表示でした。その後、徳川家からお許しを得て、真田家は再び、三代目の幸道より、「幸」の字を当主の名に代々つけるようになるのですが。

また、真田家では、家臣が家宝の血を運ぶ際にも、独特の作法があつたそうです。両手を交差させ、胸に

一方、弟の幸村は豊臣側のお側衆になり、豊臣家重臣・大谷吉継の娘(姪とも)を正妻に頂きました。こうした事情もあり、兄弟は東西に分かれたのです。

関ヶ原の合戦では、西軍についた昌幸と幸村が、再び上田城に籠城しました。

家康の息子、徳川秀忠の軍勢が関ヶ原を目指して、東から中山道を攻め上がってきたのですが、それを上田城で足止めします。

戦上手の昌幸に徳川勢はすっかり翻弄され、上田城を攻め落とせず、もたつくうちに肝心の関ヶ原の戦いに遅れてしまった。大失態です。こうして、二度までも真田は徳川勢に煮え湯を飲ませた。この恨みは後々まで、徳川家家臣の間に深く残ることに なります。

一方、兄の信之は、ひたすら東軍の武将として徳川家のために戦場で

押えるようにして運ぶ。万が一、倒れる時はそのまま倒れる。自分の身をかばうな、と。腕の骨は折れても治る。でも、血が割れたらもには戻らない。仮に徳川家から拝領した血を割れば、それを理由に「お家取り潰し」になるかもしれないからです。

もともと真田家は信州の上田城周辺が本拠地でした。けれど、大坂の陣の後、幕府から上田城を召し上げられ、北の松代へと移封されます。他にも、様々な普請を徳川家から申しつけられ、常に真田藩の財政は苦しかった。それでも歯を食いしばって耐え抜き、他の多くの大名家が取り潰されていく中、幕末まで、しぶとく生きながらえたのは、信之の功績が大きいです。

信之は九十三歳まで生きた

信之は、あの戦乱の世に九十三歳まで生きました。彼が早死にしていたら、真田家の運命はまた違っていたはずですが。この長寿にもさまざまな執念を感じます。

信之の長男・信吉、次男・信政が亡くなり、その子どもたちの間で家督をめぐって、お家騒動が起こりかけました。この時、信之は信政の息子、幸道に家督を継がせたい、と幕府に血判状を送って嘆願しています。齡九十を超えた信之の血判状は幕府の重臣たちの心に響き、聞き入れられました。安心したのか、孫が当主になるのを見届けて信之は亡くなっていました。

徳川家への手前、信之は父、弟の墓をつくり普提を弔うことはできませんでした。けれど、信之は真田家を存続させることこそが、先に逝った父、弟に對する最大の供養と考へ、最後まで使命を全うしたのだと

戦いました。

東軍が勝利し、西軍についた昌幸と幸村は死罪を命じられます。ですが、信之が家康に必死に嘆願し一命を助けられ流刑となった。昌幸は配流先の紀州で病死しています。

しかし、戦いはここで終わらず、それから約十五年後、大坂冬の陣が起ると、幸村は流刑先から大坂城に駆けつけ豊臣勢に加わり、出城の「真田丸」に籠って、再び徳川と戦いました。夏の陣を経て、最後は討ち死して果てます。

兄の信之からすれば、自分が嘆願して命を救ったのに、裏切られたというか、どうしてくれるんだ、という気持ちになって当然だと思えます。ただでさえ、徳川家臣団にあつて、信之は肩身の狭い思いをしていくのですから。

ところが、そんな弟のことを信之は、「天下人になる器であつた」と

評している。心の中では一貫して、弟を武士として高く認めていたように思います。

よく、「真田家は家名と武名の両方を残した」と言っているのですが、確かに兄が家名を守り、弟が武名を轟かせた印象があります。

私は兄・信之の直系の子孫で十四代目の真田家当主ですが、皆さんが惹かれるのは私の先祖である信之ではなく、戰場に華々しく散った弟の幸村のほうだと思います。

確かに非業の死を遂げた、華やかな侍のイメージがある。日本人が好む、ロマンチックなキャラクターです。けれど、私は自分の祖先であるせいか、家を守り抜いた、リアリスティックの信之に共感を覚えることが多い。徳川に背いた父と弟を持ちなが

家を残していく苦勞

なことではなく、母は最後まで父に病名を隠し続けました。二回目の手術の後、私にだけ打ち明け、「覚悟しなさい」と言った。父の死に對する覚悟、それに伴い私が当主になることへの覚悟、という意味でした。父は三回目の手術を受けた後、四十五歳で他界しました。私は中学三年生。十五歳で、真田家十四代当主を継ぎました。

一般家庭から嫁いできた未亡人と、中学生の何も知らない子どもがほつりと残されたわけで、周囲の方々に戸惑いや不安があったようです。

けれど、私を「若様」と呼んで、必死に支えて下さる方々のほうが多かった。真田家の歴史や慣習を教え、頂き、私自身も本を買ひ集めて真田家と向き合いました。まずは歴史小説、池波正太郎の『真田太平記』から入りました(笑)。

思います。

時を経て、幕末になり真田家はふたたび、東か西かの厳しい選択を迫られました。

関ヶ原の時とは逆に、今度は西から官軍が攻め上がってきた。東の徳川か、西の官軍か。どちらにつくかで真田家の命運が決まる。家臣たちの意見は割れたそうですが、最後は官軍側についた。その結果、明治維新以降も、華族(子爵のち伯爵)として叙せられることになりました。

「若様」と呼ばれて

私は昭和四十四年、東京生まれです。特に親から「家」の由来や歴史を聞くことなく育ちました。父母は私に「真田家」の末裔である、過剰に意識させたくなかったのだと思えます。

祖父の代までは、本当にお殿様で

私も大変でしたが、当時の母の苦労は並大抵ではなかったと思えます。真田家という以前に、三人の子どもを残して働き盛りの夫に先立たれてしまったのですから。大名家の末裔といっても祖父がそんな風で、何も資産はない。母は父を看病する傍ら、ひそかに勉強して宅地建物取引主任者の資格を取り、父が亡くなるとその資格で生計を立てました。

私も奨学金を活用して進学したので、当主になった直後は、本当に困惑することばかりでした。中身は平凡な中学生の子どものなのに、松代では「若様」と言われて、年配の方々に前に挨拶しなくてはならない。

その上、当主になった翌年が善光寺の御開帳でした。御開帳は数えて七年に一度行われるのですが、毎回、旧真田領より回向柱となるご神木を奉納しており、真田家当主が本

ました。身体が弱かったということもあり、仕事はしていませんでした。けれど戦争が終わって華族制度も廃止され生活は一変しました。戦後の財産税で土地はほとんど手ばなしだ。祖父は物静かな、浮世離れた人でしたから、まったく商売下手というか資産運用なんて考えられなかつたようです。

また、これは賢明な判断だったと思うのですが、大名道具など、先祖から伝えられた品々は、すべて松代町(現・長野市)に無償で寄付していただきます。

一方、父は、そんな祖父を見て育ち、まったく違う生き方を選びました。エンジニアとなり、当時、開局したばかりの日本教育テレビ(現・テレビ朝日)に入社したのです。

なんでも入社試験は、「テレビを一台自作する」という課題だったとか。だから家のテレビも父のお手製

でした。映りが悪くなると、父が後ろの板を開けて直してしまふ。子ども心に「すごいなあ」と尊敬した。私が理系の道に進んだのは、そんな父からの影響です。

父はテレビカメラを担いで撮影現場に駆け付け、編成もしていたとか。あと、受付嬢だった母と社内結婚もした(笑)。真田家の歴史上、初めての恋愛結婚かもしれません。

私が初めて真田家が治めていた土地、信州の松代を訪れたのは小学校に入学してからのことでした。世が世なら、いわゆる「お国入り」です。でも、私は姉と公民館で卓球をして遊んでいて、父だけが家臣団の末裔の方々とお会いしたり、菩提寺に墓参してました。

そんな状況が一変したのは、父が癌を患ってからです。私が小学校の高学年になった時のことでした。

当時、本人への告知はまだ一般的

だようでした。

挨拶文は家臣の末裔の方が巻紙に書いてくださったのですが、私は慣れない棒姿で本殿に進み、緊張の極みでした。読み間違えないようにと、いう一心で必死だった。声は上ずり、手は震えました。

だいぶ経ってからのことですが、この時の話を松代の菩提寺、長国寺のご住職にしたら、こうおっしゃった。

「若様、別に殿様は間違えてもいいのですよ。家臣が助けますから。家臣はそのためにいるのです。けれど、絶対にうろたえてはいけません。そうだったのか、と感じ入りました。」

二〇一六年は、NHKの大河ドラマで真田家を描いた「真田丸」が放映されると聞き、とても楽しみにしています。注目しているのは、やは

幸村の人心掌握に注目

いなかったので。私自身は「男の子を産んで欲しい」と言っただことも、思ったこともありませんでした。けれど、考えてみたら、私自身、母が三十八歳で産んだ子どもなのです。私の上にはふたり姉がいます。それなのに、当時としては高齡出産と言われる年齢で母は私を出産した。やはり母にも大きなプレッシャーがかかっていたのだと、初めて思い至りました。今では、私もふたりの息子に恵まれ、少しずつ私が出席している行事へ参加させるように促しているところまで。

り大坂冬の陣での出城・真田丸での戦いです。約五千人の浪人を束ねて、幸村が陣頭指揮を取りました。幸村は関ヶ原以降、約十五年間も流刑地で警居せられていた武将です。すでに「過去の人」だったはずなのに、なぜ浪人たちは、命を預けて戦おうと思っただのか。一体、どうやって幸村は人心を掌握し、彼らを束ねて数方という敵を迎え撃てたのか。もちろん、ドラマはフィクションとした上で、どんな解釈が披露されるのか期待しています。歴史を振り返って思うところがある。とすれば、人間の本质はそう変わらな、という点につきま。信之は、「下知を与えるにしても、金銀を与えての下知でなければ戦いはままならない」といった言葉を残しています。ただ命令(下知)だけしてもダメだ、ちゃんと褒賞を与えないといけない、と。

私も今、大学の研究室を運営し、学生たちを指導していますが、何か学生にさせようとする時、学生にもプラスがあるか、それをやることで、場合にによっては自ら目の前で「やらせ」と頭ごなしに言ってもダメな見せなくてははいけません。生活態度でも研究でも、まず手本を示さないダメです。真田家はレキジヨ(歴史好きな女子)に特に人気があるんだそうだが、私が増やさなければいけないのはリケジヨ(理系女子)。理工学部のは広報も担当しておりますので、それは最後に皆さまお間違えのないようお願いいたします。う、お伝えしないと(笑)。男女を問わず理系の学生が増えるように鋭意努力しています。

殿様の心得といえれば他にもある。湯加減を聞かれても、「結構です」と言うしかないので。 「ぬるい」、「あつ」といえば、役目を仰せつかった人のメンツが潰れる。場合によっては腹を切る、といった事態にもなりかねない。思っただことを気軽に口にしてはいけません。だから、あんまり殿様も結構なものではないですね(笑)。 学習院高等科から慶応大学理工学部に進学した際には、こんなことがありました。数学の授業に初めて出席した日のことです。教授に呼び止められた。 「君、真田って名前だけれど、真田家と何か関係あるの」 「はい、本家です」 と、お答えしたら、 「そうか……、私は真田家家臣の末裔なんだ」

その後、教授は悩まれたそうです。 「これで出来が悪かったらどうしよう。主君の子孫に不可をつけていいものか」 幸い、成績はAを頂きました(笑)。 卒業後、私は電子通信の研究を極めたくて、無線研究で有名なカナダのピクトリア大学大学院へ奨学金を得て進学しました。 ところで、奨学金をもらって研究室に入ると基本的に学生扱いは簡単に入ります。雇用関係という感じで、しかし私にはどうしても年に一度松代に帰らなくてはならない事情があります。 松代町で開催される「松代藩真田十方石まつり」で、「真田信之」役として甲冑姿になり馬に跨って、代町内をパレードしなければいけ

いからです。 けれど教授は、「何でフェスティバルに君が出るんだ。遊びに行く必要はない」と言っけて許してくれない。私も必死になって、「私はサムライの子孫で、Feudal id(封建領主)の末裔なんです」と説明したのですが、文化の違いもあり、意味が伝わらない。最後は松代の商工会議所の方たちが英語の嘆願書を送ってくれまして、ようやく教授が折れてくれました(笑)。 私は三十過ぎまで独身で、「君様、ご結婚はまだですか」と松代に帰るたびに問われ、いつも笑ってごまかしていました。研究に没頭していたのです。 けれど、その後、結婚し男の子が産まれた時、松代の人たちの喜びやうを見て、改めて驚いたというか……、うかつなことに、私は妻にかかっていただいたプレッシャーに気づいて